

世界が
認めた
ニッポン



Russian Federation

100年壊れない瓦。極寒のロシアで活躍 「石州瓦」

冬ともなればマイナス50℃を下回る地域すらあるロシアで、日本の石州瓦が珍重されている。寒さにも塩害にも耐える卓越した耐久性は、1200℃を上回る超高温で「焼き締める」からこそだ。

日本三大瓦産地のひとつ、石州瓦。島根県西部の石見地方で作られているこの屋根材が、海外からの注目を呼んでいる。何よりの魅力は、100年以上は使える耐久性だ。屋根材は絶えず雨や雪にさらされている。瓦には目では見えない大きさの細孔が存在し、そこに水が浸入する。浸入した水が冬に凍結と融解を繰り返す中で、瓦は徐々に劣化する。しかしながら、石州瓦は、水が浸入する細孔が少ないのだ。

「素材を形成する粒子が加熱により結合することを焼結といい、一般に温度が高いほど焼結が進行し、細孔は少なくなります。他産地の瓦の焼成温度は1000～1150℃ほどですが、石州瓦は1200℃。そのため焼結が進行し、凍害と塩害に強い瓦となるのです」(石州瓦工業組合)

中国や台湾の他、東南アジアにも輸出しているが、中でも石州瓦を高く評価するのがロシアの人々だ。ウラジオストク、サンクトペテルブルクで特に人気を集めているという。

石州瓦の産地の中心である江津市とロシアは実のところ、“奇縁”で結ばれている。それは日露戦争中の1905年、日本海海戦で被弾したロシアの特務艦が江津市沖に沈没した「イルティッシュ号投降事件」。乗組員たちが武器を海に投げ捨てるのを見るや、地元の人々は果敢に海に飛び込み、彼らを助けた。以来、この地では毎年「ロシア祭り」が開かれ、亡くなった乗組員の慰霊碑も建てられている。市民レベルの交流も続く中、近年は交易も活発化。ウラジオストクで開いた島根県産品の見本市に出品された

石州瓦に現地の建材商社が目をつけ、2007年から本格的な輸出が始まった。

「初めは日本から職人が出向いたものでしたが、今では技術を学んだ現地の方が施工しています。少々値が張るせいか富裕層のステータスシンボルという一面もあるようです」

「赤瓦」とも呼ばれる石州瓦だが、近年は色や形状の選択肢も豊富で洋風建築にも合う。マイホームの新築やリフォームを考えている方は候補に加えてみては!?

